



ある新聞記事に「模擬葬儀」で自分探しという記事が掲載されていた。目的は自分にとって「本当に大切なもの」は何かに気づくことらしい。自分の死と向き合うことで、残りの人生の見え方が変わるというものなのだ。

「死と向き合う」ことの設定がどうなされるのか非常に興味深いところではあるが、人生の終わりがみえると、そこで初めて手放したくないもの、本当に大切な何かに気づくと押しえられている。しかし、現実死に直面することと、仮定とではかなり異なる結果しか見えてこないように思えるのだ。

人生の終わりをみるというよりも、私たちは日常から「いつどうなるか分からない人生を生きているのだ」ということを心から願っていくことではないかと思っている。

かつて終活によって実際に棺桶に入って気分を味わったりしている映像も流れていたことを思い出すが、多分に気分的で気休めのようにしか思えなかった。仏法ではやがてやって来るだろう人生の終わりを言っているわけではない。まさに「我やさき、人やさき、今日とも知らず、明日とも知らず」なのである。このことをよくよく心して生きるところに自ずから「大切なこと」も知らしめられてくるのではないだろうか。

懐かしい竹とんぼ



思わぬ方からいただきました。

上宿の下野邸のしだれ桜の咲きぐあいをのぞき見に行った折、偶然出会った方からいただきました。
この方は子供たちを集めて竹とんぼに限らず自然の素材を利用して様々な作品作りの指導をいらっしゃる方とか。あまりの懐かしさについ喜んでいただけてしまいました。実際に飛ばしてみました。精巧に作ってあるせいか、うっしょもよく飛ばす「とんぼ」だった。

その時に

Y・Y

私たち夫婦は今年で六十年以上の生活を共に生きてきました。一人とも親もなく、兄弟も一人一人と亡くなり身の回りからどんどん人が消えてゆきます。幸い子供が二人いるのですが、それぞれ家庭を持ち遠くで暮らしています。息子は故郷を忘れたように一戸建てを買い、こちらに帰ってくる気持ちはどうやらないように思われます。姉である娘は夫の仕事の関係でナダに住んでいます。これらいつかは本当に心細いものです。

今では老夫婦一人の生活となり、お互いがとても大切な存在になりました。ちょうど二本の割り箸を立てて支え合っているような心もとないものです。どちらかがこけたら一も一もなく人生が終わるよう思えます。どちらかが病気にでもなればどうなるのだろう。本当に心細い晩年になってしまいました。

戦後七十数年、日本は経済的に豊かになりましたが、心は深い闇のような世界が広がり始めたように思います。何がよかった悪かったといまさら言ってみてもどうしようもありません。これからも何がどうなるかどうかさっぱり分かりませんが、いよいよ仏法を聞く時か、と思うようになりました。

たとえ残された寿命が一日であったとしても、「安心」の世界で生きていきたいと、夫婦とも思っているところです。



共に認め、生かし合う世界をここに作る。

飛龍梅の剪定が終わりました。



芽がふき、枝が伸び、花芽をつけて、花が咲く。この一連の流れの中に、共に生きていく喜びを感じてきたように思います。咲くときも、散るときもいつも一所懸命なのです。

花は盛りに、月は隈なくまなきをのみ、みるものは。雨に對ひて月を恋ひ、垂れこめて春の行方知らぬも、なほあわれに情深し。咲きぬべきほどの梢、散り萎れたる庭などこそ、見所多けれ。

徒然草 一三七段 吉田 兼好

すべての物は移ろひて無常觀に裏付けされた吉田兼好のもの見方が、新しい視点に立った美の見方を生み出している。

通釈

花は今を盛りと咲き誇る満開の花だけを、月は少しの陰りもなく輝いている。咲きだけを、素晴らしくして見るものである。うか。いやそいつではない。雨空に向かつて見るこのできない月の姿を慕ったり、すだれを垂れ、その中に閉じこもって、季節の移りゆく様子を知らないまま過ごすのも、やはり優雅で趣が深い。また、今にも咲きそつな花の木の梢や、散り萎れて庭に落ちている様子などは、格別に趣があつてよいものだ。

報徳会

来年四月十四日(水)・十五日(木)勤修

いよいよ一年後は光受寺が当番寺となります。お世話になりますが、よろしく願いたします。

四月の予定

今年「コロナウイルスの影響」によって中断していた同朋会、金曜喫茶。いまだ終息の目途が立っていない感じですので、しばらくお休みさせていただきます。

金曜喫茶 中止

同朋会 中止



新聞原稿募集中

日頃の思いや趣味、得意料理、旅先で出会った珍しい物、やじなど、写真だけでも結構です。インスタ感覚で投稿よろしく願いたします。

(4月) 今月の掲示板

人は

出会いによって

育てられ

人生は

別れによって

深められる



この法語は二〇一八年八月、東本願寺発行の月間同朋の行灯法語として掲載されたものです。暇に任せてあれこれと読み返していた時、目に留まった言葉でした。

四月は、様々な出会いと別れが多い時節です。もちろん四月に関わらず私たちは今までも「多々の出会い」と別れを繰り返して生きてきました。自分によって都合の良し悪しを超えて、私たちを育ててくれたことを感じる「しひとひの縁」です。

出会いがあれば別れは必ずやってきます。さまざまな人との別れによって、人は人として生きること深く問ひつゝ「しひとひの縁」なのです。